

『誰も教えてくれなかったスピリチュアルケア』

岡本拓也(著)

北海道医療大学客員教授 石垣 靖子

かけがえのない一人の存在として尊重すること

私たちは誰もが人生の折々にスピリチュアルな苦悩に直面する。患者のスピリチュアルな苦悩に医療者は当然対応すべきものであるが、適切なアプローチがとられず、時には睡眠薬や抗不安薬などで、患者はその苦悩に向き合うことすらできずに最期を迎えることさえある。著者がいうように「スピリチュアルペインは人間にとって成長の痛み」であるにもかかわらず。

本書はスピリチュアルケアについて、丁寧に、丁寧に解きほぐしている。すなわち、「スピリチュアリテイ」、「スピリチュアルケア」、「スピリチュアルペイン」、「スピリチュアルな経験」について、医療の実践家にわかりやすく(時には哲学的表現で)丁寧に説き、「目の前の相手を人格として大切に遇せよ」という結論に導いてくれるのだ。読者は読み進むうちに医療者としての自分自身の原点に立ち返り、「人を大事にする」という姿勢に立脚することが、最も大切なケアであることはもちろん、そのプロセスを通して自分自身の成長につながっているのだと気づいていく。医療・ケアの対象は、かけがえのない存在としての“個”であり、それをどれだけ尊重できるかが、その質に大きく影響することを改めて確認

した。

1980年に出版された「ホスピス(A Way to Die)」(岡村昭彦監訳)のなかで、ホスピスの患者になった一人の少女 Jane Zorza の、「Here they treat me like a human being all the time, not just when they feel like it」という言葉がある。著者が患者を一人のかけがえのない「人間として遇する」ことがスピリチュアルケアの基本だと説くのはこの意味だろう。多分それは、スピリチュアルケアのみならず、医療者として患者・家族に向き合う時の基本的な姿勢でもあるはずだ。

著者が強調するスピリチュアルケアはスピリチュアルペインに対するケアではなく、スピリチュアルペインをもっている人に対するケアであることを医療者は銘記すべきである。

それは、Cicely Saunders の「患者をケアする人たちは、患者の苦悩の意味を説明しようと試みないことが大切である」という言葉と重なる。

久しぶりに読みごたえのある、しかも納得しながら読み進んだ本に出会った感がある。

● A5 / 頁 208 / 定価 2,700 円(本体 2,500 円 + 税 8%)

2014 年 4 月 [ISBN978-4-260-02010-7] 医学書院刊